

削って、掘って、そして、つなぐ

宮本真二 みやもと しんじ / 滋賀県立琵琶湖博物館、AA 研共同研究員

削ることによって、何が分かるのでしょうか？
また、削ったり、掘ることにこだわって、
フィールドワークをするのはなぜでしょうか？
過去をつなぎ、異分野をつなぐ仕事とは？

考古少年、地理学から環境考古学の道へ

私は小さな時から遺跡大好きな「考古少年」でした(写真1)。当時はいっばしの考古学者気取りで、自転車で遺跡探検に出かけていました。当然、大学では考古学を勉強する予定が、自然科学も人文・社会科学も勉強できるというたい文句に誘われて、地理学を学びはじめました。

このように、私は地理学を専攻し、「自然環境の変化と人間活動の対応関係の解明」を研究テーマにしています。またこの研究テーマは、歴史学や考古学などの異分野の研究とつながりが深く、環境考古学や環境史とも呼ばれています。

ここでは、私自身の経験から、研究やフィールドワークの魅力についてご紹介しませ

土地の履歴

大学院の博士課程の時、指導教官から「ヒマラヤに行ってみないか？」と誘われました。もともとヒマラヤという高所への憧れもっていましたので、二つ返事でヒマラヤに出むき、今に至っています(図1)。

ヒマラヤでは、研究のトピックとして、高所にいつ、どのようにしてヒトが住み始めたのか？ という議論があり、それをテーマにしました。ほんとうは、ヒマラヤでの山登り・トレッキングがたいへん魅力的だったのですが、あえて、ここでは書きません。

過去を対象として研究する場合、日本のように文字記録や、考古学の情報が豊富な地域はまずありません。したがって、言語学的な情報や、伝説などが研究素材として用いられますが、この情報も限定的です。もちろん、ヒマラヤも状況は同じです。そのような中、「埋没腐植土層」という堆積物の層に注目しました(写真2)。

ある土地において、山野を焼くなどの火入れを伴う土地開発が行われていた場合、当時の地表面の土壌化が促進され、その後の堆積作用によって、当時の地表面が埋没して残されます(図2)。また、この埋没腐植土層中には、火入れの痕跡として、炭化した木片(炭)(写真3)を含む場合もあります。

つまり、ヒトの土地への働きかけ(土地開発)によって形成された埋没腐植土層の各種分析から、当時の自然への働きかけの一端を明らかにできます。例えば、埋没腐植土層に含まれている炭化した木片の年代測定から、いつこの地に火入れを伴う土地開発が行われたか、ということが分かります。さらに、埋没腐植土層中に含まれている花



写真1 滋賀県、守山市の弥生時代の遺跡での調査風景(左端が著者)。考古学の遺跡の場合、世間的な注目は、「最古の……」のような遺物(モノ)だが、私は、トレンチ(壁)の堆積物に夢になって、なぜ、この場所に、ヒトが住み始めたのか？ ということに興味をもって調査している。

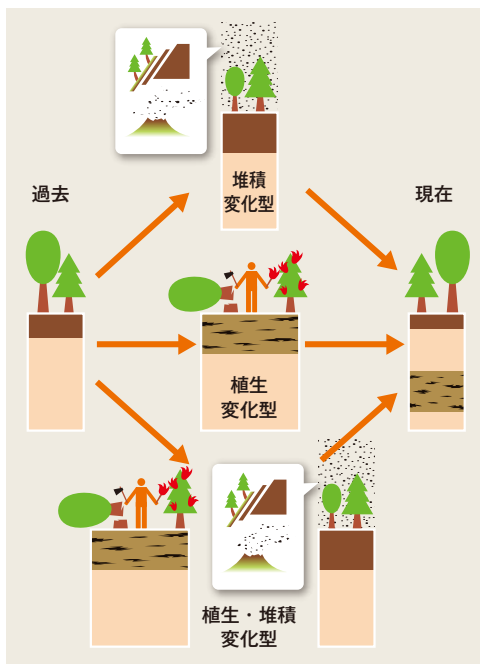


図2 埋没腐植土層の形成モデル。堆積変化型は、地すべりや火山灰の降下など急速な堆積作用によって過去の地表面が保存された場合、植生変化型は、火入れを伴う土地開発が過去の地表面の土壌化を促進させた場合、植生・堆積変化型は、両者が組み合わさったもの。

写真2 インド北東部、アルナーチャル・プラデシュ州のタウン近郊の埋没腐植土層(黒色部)(人物は、京都大学・院 石本恭子さん)。

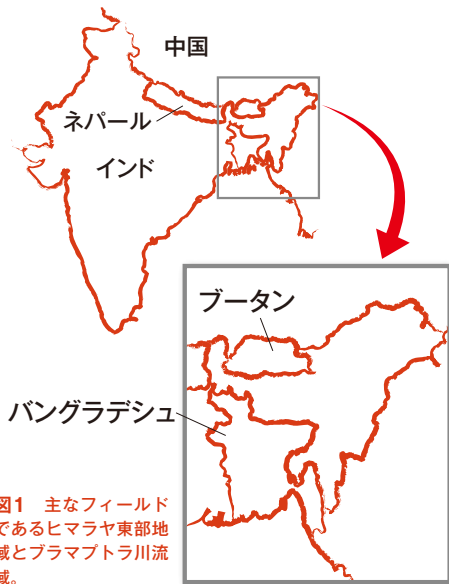
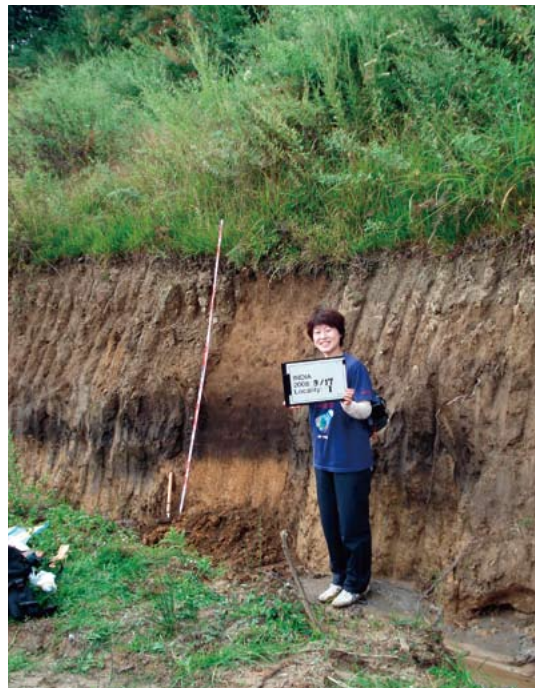


図1 主なフィールドであるヒマラヤ東部地域とブラマプトラ川流域。



写真3 インド北東部、アルナーチャル・プラデシュ州での炭化した木片の調査。この黒くぼくぼくしている部分は、火入れによって焼けた木の根の部分だと考えられる。標高2860m。現在はヤクの放牧地になっており、草原化している。

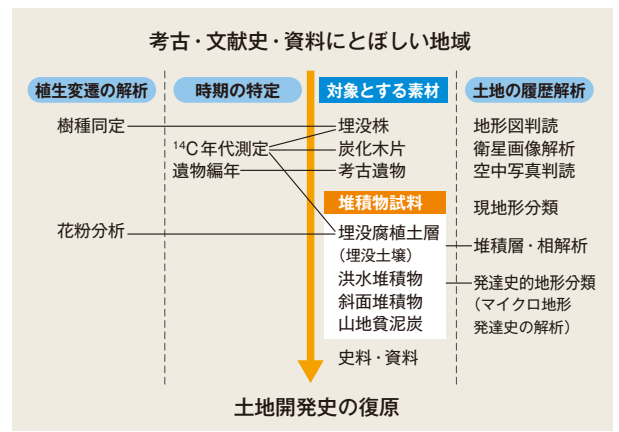


図3 間接的な歴史の描き方。

粉の化石を分析することによって、どのように植生が改変されたのかということも推定できます。

このように、美しくはない黒い埋没腐植土層や、それに含まれている炭がヒトの移動と土地開発を特定する有効な指標となり、「土地の履歴」を明らかにすることにつながります。つまり、この埋没腐植土層は、火入れなどのヒトの土地に対する働きかけの結果、形成されたと言えるのです。

「削ること」、「掘ること」

つついて埋没腐植土層や炭を探し出し、「語らせる」ために、「掘ること」と、「削ること」をご説明します。

平たく言えば、「削る」ということは、道路工事などでできた露頭に近寄って、堆積物を詳しく観察するために、クリーニング（掃除）することです。まず、歩き回って危険がない適切な場所を探します。そして、ヘビや危険なムシがないことを確認し、草や根、さらに、「不快」なもの（排泄物など）をスコップで排除します。つづいて、ねじり鎌（園芸用の草切り道具）で、地層の上から順番に堆積物の性質の違い（砂とか泥とかの区分）を観察しながら、「美しく」クリーニングします。その後写真をとって、もう一度、クリーニング後の「美しくなった」露頭をガリガリ「削り」つつ、地層の境界などにクギで線をひきながら、どのように堆積したのかを考えます。さらに写真撮影後、線で区分した地層ごとに、堆積物の特徴をフィールドノートに書きとめ、最後に必要な試料を採取します。また、露頭がなく削れない水田などでは、トレンチという、人が一人だけ入れるような穴を「掘って」、同じ作業を行います。

この作業だけで数時間はかかり、集中力（根気）と体力（腰痛との闘い）の勝負です。

勝負する必要はないのですが……。

間接的に歴史を描いて過去を「つなぐ」

図3では、土地開発史を明らかにするための方法をフローチャートの示しています。各種の分析項目がでていきますので、先の「削り」、「掘る」作業と、各段階で明らかにしたいこととの関係がお分かりいただけると思います。ここで重要なのは、ヒトが残したモノ（考古学の遺物や遺構や、文字史料）ではなく、埋没腐植土層や炭化木片などの「間接的な素材」を用いて、民族の移動と土地開発史という、歴史の一端を描くということです。歴史学や考古学の研究では、ヒトが残したモノによって、研究が時代的にも、地域的にも限定的されるのに対し、私たちの方法では、堆積物という、どこにでもある素材から、歴史の一端を描けることに利点があります。

いわば、文字や遺物や遺構が残されていない地域でも、堆積物によって歴史の一端を描けるという利点です。

「パーツとして分散している過去の情報を、たまたま残った堆積物に語らせることで、パズルを組み立てながら歴史を描くこと（復原）」が可能になり、迷路のような歴史のパーツを「つなぐ」こともできます。

過去を復原して異分野を「つなぐ」

最後に、異分野を「つなぐ」ことを考えます。

これまでくり返し自然科学や人文・社会科学の「乖離」が問題視されてきました。

例えば、歴史学や考古学といった過去を対象とした人文科学に限定しても、その領域内で完結するような「閉じた研究」が多いと思います。「狭く・深く」といった学問の個別細分化への弊害で、「分断の溝」は未だ深いのが実情でしょう。

堆積物からみた人間活動に関心がある私としては、「ヒトにとっての自然」＝「生活舞台としての自然」という視点を大切にしています。フィールドワークを伴う地域研究は、自然科学の研究者も人文・社会科学の研究者も行っています。しかし、「お題目ではない」総合的な地域研究を行うためには、自然科学の研究者は、人間の生活舞台としての自然という視点をもつことで、メカニズム研究の素材としての自然のみではなく、人間にとっての自然研究を展開すべきでしょう。いっぽうの人文・社会科学の研究者は、自然科学の分析や技術といった高度化された方法をまずは理解しつつ、自己領域内で完結するような内向的な（閉じた）研究テーマ設定だけでなく、問題関心が他分野へと開かれるような問題設定の提案が強く求められるでしょう。これが結果として、異分野が「つながった」共同研究を生み、実体を伴った総合的な地域研究へと展開できます。

もちろんこのような研究スタイルが難しいことは承知の上ですが、今後の「地域研究」を考える場合、多様な分野を「つなぐ」ことができる研究方法は、とても大事です。

異なる分野の方とフィールドを歩くと、予期せぬ発見の連続です。何気なく感じていたものが、とても重要なことであったり、返答に窮するような異分野の視点の違いは、予期せぬアイデアさえ浮かんできます。

「ああ……！ こういうことか！」と、フィールドでひらめく瞬間は、フィールドワーカーなら、容易に共有できるでしょう。

私自身、多様な分野からの批判に学べるような「やわらか頭」で、今後もフィールドを歩きたいと思っています。

ただ、「宮本は、落ち着きがなく、世界各地をフラフラしている。」と、某先生の悪口が……。